

在日コリアンのアイデンティティと教育

名古屋市立大学 成玖美

今回対象とする「在日コリアン」とは、戦前・戦中に朝鮮半島から日本に渡り、戦後も日本で暮らし続ける人々と、その子孫を指す。

在日コリアンの形成史

1910年の韓国併合により朝鮮半島は日本の植民地となった。その後の朝鮮総督府による土地・農事改良事業の過程で、多くの自作農民が小作農や極貧農へ転落し、生活の糧を求めて農村から都市へと流入した。さらには国境を越えて移動する人々も増え、すでに19世紀後半から朝鮮人の流入が見られた満州（中国東北部）や沿海州（極東ロシア）に加え、1920年代頃からは海を渡って日本へ向かう流れも起き、その数は終戦まで増え続けた。

1939年からは日中戦争による労働力不足から朝鮮総督府と企業との協力による労働者募集が始まり、それが「官斡旋」方式、戦争末期には「徴用」へと、公権力の関与と強制性を強めていった。終戦の段階で、日本に200万人以上の朝鮮人が住んでいたといわれる。

1945年8月15日、日本の敗戦により朝鮮は解放された。多くの朝鮮人は下関や博多などの港から朝鮮へと帰国した。しかし米ソの軍政が敷かれた朝鮮半島の政情混乱を嫌ったり、既に日本で生活の基盤を形成していたりした者が帰国を先延ばしして、約65万人の朝鮮人が日本にとどまった。その人々が現在の在日コリアンの直接的原点である。

アイデンティティと教育のあいだ

今日、人権をめぐる国際的議論の中では、外国人やエスニック・マイノリティの民族や言語・宗教等に関わるアイデンティティ（以下、文化的アイデンティティ）の保護にまで踏み込んだ議論が展開されている。

文化的アイデンティティは、その原初的狀態においては、生れ落ちた社会的環境の中で自然生長的に形成される。家族生活や地域社会の習俗などの影響を受けて、教育営為の関与を必要とせず形成されるものである。

しかし「教育」は、文化的アイデンティティの形成を「望ましい方向」に向かって統御することができる。ここで「望ましい方向」とは時代背景や権力者、教育者の意向によって左右される。戦中の「皇民化政策」下における学校は、日本語の常用化や創氏改名の奨励など、朝鮮人を日本人へ同化させる上で大きな機能を果たした。現在の日本の学校における日の丸・君が代の強制なども、国家への強い帰属意識を「望ましい」と考える人々による、文化的アイデンティティへの介入であるといえよう。

しかし「アイデンティティは個人と社会との弁証法」（P.L.バーガー&T.ルックマン）と言われるように、人間は、社会からの働きかけを直接内面化するのではなく、それに抵抗したり、解釈したり、選択したりしながら、自らのアイデンティティを構築していく。教育とアイデンティティの間には、こうした相対化と選択的獲得というプロセスがあり得る

ことも、念頭におくべきである。

民族教育とアイデンティティ

朝鮮半島で少年～青年期を送り渡日した在日一世は、戦中の皇民化政策の中、表面的には日本人になり得ても、内実は揺るぎない朝鮮人であった。しかし日本の学校で教育を受けた在日二世にとって、終戦による「日本人」から「朝鮮人」への転換は容易ではなかった。こうした二世のために、朝鮮人は解放後、集住地域に「国語講習所」をつくり、子どもへの朝鮮語教育を始めた。この実践が「在日本朝鮮人聯盟（朝聯）」による民族教育の制度化へと繋がる。しかし日本政府とGHQは、朝聯と朝鮮人学校を危険視し、強制解散や閉鎖命令等、強く迫害した。下火になった民族教育は、1955年に「在日本朝鮮人総聯合会（総聯）」が結成されることで体系的な組織化が再開された。朝鮮学校では、朝鮮語の習得による朝鮮人としての自覚と自立を目指す教育が行われてきたが、近年では日本の学校教育内容も取り入れ、日本と朝鮮半島との架け橋となる人間の育成を意識するようになったと言われる。現在、幼稚園から大学まで、全国に約140校の朝鮮人学校が存在する。

また、日本の公立学校においても、関西や神奈川などで、在日コリアンの子どもが本名を名乗ることを促す運動や、課外活動としての民族教育の実施など、在日コリアンとしてのアイデンティティ形成をはかる教育実践の一定の蓄積がある。

生涯学習による文化的アイデンティティの構築

こうした学齢期の「学校」における民族教育実践が存在するものの、実際には大多数の在日二世や三世は日本の学校に通い、民族教育の機会に触れずに成長しており、在日コリアンの9割が通名（日本名）を使っているといわれる。差別の厳しかった二世の時代と比べ制度的差別の撤廃が進んだ三世や四世の時代になっても、日本社会のアジア蔑視や単一民族神話は根強く、在日コリアン自らが劣等感を抱えて生きている。たとえ在日コリアンであることを表明しても、同世代の日本人の無知や無関心によって嫌な思いをすることも多く、また自分自身がコリアンとしての内実をもたないことに矛盾を感じる者も多い。

こうした人々が文化的アイデンティティを構築する場として、学校教育以外のノンフォーマルな学習機会が存在する。その一つの機会が、在日同胞青年組織である。総聯や民団（在日本韓国民団）にはそれぞれ地域支部ごとの青年会や学生会がある。また主な大学に置かれている研究会（サークル）などもあり、在日コリアンの青年が出会い、朝鮮の言葉や歴史等について学んだり、胸襟を開いて議論したりしながら、コリアンとしての自覚と自尊心を得る自己教育・相互教育の場となっている。近年では在日コリアンを中心とするNPOの設立もみられ、相互教育や社会参加、日本社会へのメッセージの発信源としての役割も果たしている。さらに、韓国の大学への留学や語学留学により、在日コリアンとしての内実を得ようとする者も少なくない。

さらに、日本人との共同・協同的な学びや、グローバルな課題への学びからも、在日コリアンは反照的に自己のアイデンティティを確認することが多い。また民族性とは直接関

係しない、趣味や教養、資格などの学びを通して自己実現をはかることによって、在日コリアンとして生きることに自信をもつ人も少なくない。生涯にわたる様々な学びや経験を経ながら、在日コリアンのアイデンティティは構築とゆらぎの過程を繰り返している。

こうした経験を経て、学校が期待する「望ましき」を相対化し、日本人でも（本国の）コリアンでもない、在日コリアンとしての等身大のアイデンティティをもつ人々が増えている。それは「境界人」である自分をポジティブに捉える自己認識であり、二者択一的志向から解放された、自由なアイデンティティの持ちようである。

在日コリアンと「言語」

最後に、本セッションのテーマである「言語」と在日コリアンとの関係性について触れておく。いわゆる少数民族の言語と違い、朝鮮語／韓国語は母国で現在でも自然に継承されており、言語自体の博物学的希少度は問題とされない。また戦中の皇民化政策により強制的に日本語の普及が図られたことにより、現在ニューカマー外国人が抱えているようなコミュニケーションや教育上の言語問題を、皮肉にも、あまり経験してこなかった。

在日コリアンにとって言語の問題とは、ほとんどの場合、母語継承とアイデンティティの問題として意識されてきた。在日一世の親の朝鮮語を家庭で耳にしていた在日二世でも、朝鮮語を不自由なく話せる者はごく少ない。在日三世ともなれば家庭での自然な言葉の継承は不可能であり、外国語として韓国語を学ぶほかない。朝鮮人学校が最も重視してきた朝鮮語の獲得による朝鮮人としての自立は、現在ではそれを仕事に使う人など、ごく一部の在日コリアンに実現されているに過ぎない。確かに、朝鮮語／韓国語を少しでも学ぶことが在日コリアンとしてのアイデンティティの補強材料となったり、他者から「在日コリアンらしい」と認められたりして、劣等感からの解放につながることは多い。しかし「朝鮮語を話せなければ朝鮮人として失格」というような言語至上主義の考え方は、現実的でない。言語はアイデンティティの一つの要素であり大切だが、それ以上に、ルーツを肯定的に捉えて多民族社会の中で柔軟に生きるアイデンティティの持ちようが、現在の在日コリアンに求められていると考える。

参考文献

- ・在日本大韓民国民団 中央民族教育委員会企画『歴史教科書 在日コリアンの歴史』明石書店、2006.
- ・P.L.バーガー&T.ルックマン『日常世界の構成－アイデンティティと社会の弁証法』（山口節郎訳）、新曜社、1977.
- ・福岡安則『在日韓国・朝鮮人－若い世代のアイデンティティ』中公新書、1993.
- ・姜尚中『在日』講談社、2004.
- ・高史明『生きることの意味－ある少年のおいたち』ちくま文庫、1986.
- ・成玖美「外国人の人権と文化的アイデンティティ」（日本社会教育学会編『講座 現代社会教育の理論Ⅱ 現代的人権と社会教育の価値』東洋館出版社、2004.